平成２３年３月２２日

日本シルクロード探訪ツアー【港都横浜】編　参加者の皆様へ

阿部勇

楽しみにしておりました企画に参加できず残念です。横浜行きのバス中で私が話す予定になっていました内容の一部を以下に記します。

【日本初の輸出生糸は上田から】

・横浜開港（１８５９年―安政６年６月２日）当初から小県上田の生糸は横浜に

・上田藩の糸は中居重兵衛に横浜で扱わせた―中居屋は横浜最初で最大の外国へ生糸を売り込んだ商人―大番頭は上田市丸子飯沼の医師、松田玄冲（番頭名、中居重衛門）

《上田の生糸は土橋（原町）の武蔵屋北沢佑助が６月中に横浜へ持ち込んだという説

・原町鼠屋伊藤林之助日記によると最初の上田紀伊と横浜持込みは７月５日か

・上田市丸子飯沼の生糸（吉池の依田糸）は、中居屋（中居重兵衛―撰之助）が扱う

・飯沼の吉池由之助は開港当初から横浜に常駐、外国人と生糸輸出交渉

《そのほか　甲州の生糸、いや前橋の生糸が最初という説

・明治初年―飯沼の生糸（依田糸）は横浜の亀屋原善三郎と野沢屋が扱う

・上田糸や依田糸は　主にイギリスへ運ばれフランスのリヨンで絹織物に

【上田藩は生糸輸出で財政を立て直そうとしていた】

・藩主松平忠固（幕末、幕府の老中）、開明的―開国、貿易推進の考え

産物会所→産物改所―領内の殖産政策―農産物加工品から鋸、石炭油まで江戸産物改所へ

・横浜が開港すると、領内外産物の輸出計画―――開港して間もなく外国では生糸を欲しいていることがわかり「生糸輸出」

・上田領内だけでなく他地域の物品も上田城下へ集荷

【上田城下商人鼠屋伊藤林之助は江戸・横浜生活を楽しんだ】

・安政６年２月(開港の４か月前)、林之助は「外国交易推進」の藩命を受けて上田商人代表として町田吉五郎と江戸・横浜で上田藩役人や中居撰之助・外国商人らと交渉

・林之助は２０歳。江戸では、寺社詣、上田藩重役らと猿若町へ繰り出し芝居見物、船を浮かべ隅田川の川開き(花火大会)などを楽しむ。中居撰之助邸にて数回の饗応を受ける。横浜では上陸したイギリス美人の話も聞いたり、外国語をメモしたり。

・帰田してから　２２歳で町年寄代役　　その後の消息は

【吉池定之助は明治６年、県の命を受け長野県生糸改会社の社長となる】

・横浜開港時、吉池家（岩村田領小県郡飯沼村名主）の生糸取引役割分担

文之助―飯沼で生糸取引の統括取締　由之助―横浜で中居屋や外国人らと生糸取引交渉

定之助―飯沼で小県上田・松代・飯田等の生糸集荷

・文之助、由之助親子は明治初年に生糸取引から手を引く　その後

文之助は松代に「第６３国立銀行」を設立。明治１１年、孫の文之助が初代社長となる。

・生糸輸出は文之助の甥　定之助が中心となる。横浜の生糸売込商人亀屋・原善三郎らと連携、明治５年から生糸改会社設立にかかわる。

【上田と横浜】

- **小泉勝夫さん**（今回　横浜の生糸輸出関係施設を案内していただく）

上田市浦里のご出身　信州大学繊維学部卒業　神奈川県蚕業センター等でご活躍

元横浜シルク博物館館長

日本全体の蚕糸業史のエキスパート

『蚕糸王国日本と神奈川の顛末』など

- **西川武臣さん**（今回　「横浜開港資料館」でお話をお聞きする

昨年、一昨年と上田の人々が何回も横浜開港資料館を訪れお世話になる）

故石井孝さん（後述）とも交流、横浜貿易史研究のエキスパート

上田・飯沼へ毎年調査に訪れ、特に上田市立博物館文書、飯沼区有文書の調査を通して上田と横浜の関係（生糸貿易・中居重兵衛）を研究

『幕末明治の国際市場と日本』など

【長野県栄村と横浜】

石井孝さん―生糸が結ぶ上田と横浜の関係を、横浜側から本格的に調査した最初の人物

（昭和３０年頃から本格的に調査開始―『横浜市史』―大阪大学から横浜市立大学教授へ）

特に上田市生田≪飯沼村吉池家≫の横浜向け生糸≪依田糸≫を現地に入り吉池家調査、『横浜市史』等に執筆。『幕末貿易史の研究』『明治維新の国際的環境』『明治維新と外圧』『日本開国史』『維新の内乱』『明治維新と自由民権』『明治維新の舞台裏』『戊辰戦争論』『学説批判明治維新論』『勝海舟』『幕末開港期経済研究』など。

○この石井孝さんの父が長野県栄村生まれ、医師となり栃木県佐野の医師宅に養子に入る。孝さんは１９０９生、父の故郷長野県の松本高等学校へ、東大国史時代から明治維新研究。

（栄村に居住する私の従兄妹６人が今回の地震で被災―離村するかどうかという状況。栄村の孝さんが生まれた家＝私の父の家も住むことができない状態。私は復興手伝いのためそちらへ行く。という不思議な因縁？で今回のツアーは欠席させていただきます）